お宿帳(12)　北条秀司先生書簡、タカクラ・テル氏

澤村　みどり

二枚目の葉書　花冷　秀司　老健
美味しいものですなあ　お心とともに朝晩拝味しています　カマクラの花一向開かず　六日の箱根名優連の来演まで　待機しているのでしょう　お風邪に……
(略)

平成三年四月十日　花祭
やっと春景色になりました　雨夜の笛　きかせたかったです　つかぬことをうかがいますが三越から……とやおらお心づくしはどこへ送っていただいたのでしょうか、御礼が申し上ませんので　一ぴつ……

平成三年四月二十二日　初がつお　拝謝
八十九歳の協会長にされました　もう衰死のほかありません　湯坂の頂から……の立ち小便をして五十年
山椒煮でセイをつけています　通夜百人　コユルギ大好評でした　清光園のほかは

平成三年八月十日　お盆返咲　秀司　再健
いつも　いつも申しわけありません　ウマイですなァ
惜しみおしみまだいただいていましたところです
やっと退院　八十八の盆を悲しく迎え〼(ドス)

平成三年九月吉日
わたくしのために米寿のお祝いをしていただき　その上に佃島に碑まで建てていただき　お礼は言葉につくせぬ　にもかかわらず晴の記念日に欠席し　まことに申しわけなく　深く御礼とお詫びを申しのべます
おかげさまで退院をゆるされもう一度力仕事が出来ることになりました　ほんとうにありがとうございました　とりあえず一筆御礼のみ申し上げました
北條秀司　拝

(注釈)
このお手紙は印刷です。佃島に建った碑
雪降れば
佃は古き
江戸の島
秀司

平成四年九月七日　九十童　北條秀司大老
たのしいひとときでした　ガタも大喜びでした　懐旧
塔之沢　塔見当たらず　薹(トウ)が立ち
失礼
また会いましょう　御返信無用

(注釈)
北條先生は早川の真福寺に川崎長太郎の碑を御覧になって後、緒方拳さんの運転で、御息女の美智留さんとご一緒に立ち寄られました。
桜一番にお入りになった先生は、なつかしそうに次の間の小部屋をながめて、
「ちとも変わらないねェ、ここで書物をしていたんだ」
緒方さんだけがお風呂に入られ、お夕食となりました。先生はビールを少々召し上がりながら、新宿小町と言われた母の話、箱根登山時代の話をされました。お食事もそこそこに終えられ、お帰りぎわに、緒方さんが、先生の手と私の手を握らせお別れのご挨拶となりました。この日が、北條先生が私の代になってから御来遊になられた、最初で最後の日となりました。

平成五年四月三十日　印刷にて
虹の会
五月五日　二時～五時
在宅します
無門　電話なし　駐車場なし
もてなしなし　手土産お断り
大船竹林　北條翁

平成五年六月二十八日　北條秀司　大謝
虎杖や塔福の谷すでに秋
オガタとともに近く訪ねよう
大好物　多謝　多謝

平成五年七月二十一日
お医者の命により会長をやめました　長生きして力仕事（劇作）をしたいからです　九十翁　北條秀司

平成五年十一月
秋の終わりの美しい夕まぐれ大好きな丹沢で熊と猪に別れ、大好きな相模野の芒の中で野たれ死にしたい野の果ての心のふるさとハコネよ　むかえに来い　九十一翁

これを最後として北條先生のお手紙は絶え、永劫のお別れとなりました。

タカクラ・テル氏

タカクラ・テル（本名、高倉輝）氏の小説「箱根用水」のあとがき(一)を抜粋して、概略を参考までに掲載いたしま

す。

一九四三年（昭和四十八年）の一月から五月まで『中央公論』にわたしの「箱根用水の話」がのった。これから、箱根用水のことがひろく知られるようになった。それまで、ニッポン一の観光地の箱根にありながら、この用水のことはほとんど知られていなかった。箱根用水は、ニッポン民族がなしとげた、もっとも偉大な事業の一つだと、わたしはまえから考えた。箱根・芦ノ湖の水を、湖水の西の湖尻とうげのふもとからほりぬいた、長さ一二八〇・三メートルの地下トンネルで、静岡県側におとし、数千ヘクタールの用地をやしない、今はその水で三つの発電所までつくっている。

この箱根用水のつくられたのは、およそ三百年まえ、徳川四代将軍・家綱の寛文年間（一六七〇年）で、七三三五両二分一朱の費用を使って完成している。これを、当時の人夫一人あたりの日当八十八文にわりあてると、のべ人員八三万三五八六人を使ったことになる。当時として、いかに大きな事業だったかわかる。

地下トンネルは、東の箱根がわ（神奈川県）と、両方からほりすすめられたものだが、曲がり曲がって、少しの食いちがいもなく、ぴったりあっている。当時、いかに高い科学と技術がこの事業の基礎にあったかわかる。

箱根用水は、江戸の町人友野与右衛門が中心になって作ったものだが、かれは、幕府や藩の力を借りることなく、資金は同じ町人から援助をうけ、工事は深良村の名主・大庭源之丞と付近の農民の力だけによって、これをなしとげている。事業家としての友野の偉大さがすっかりわたしをとらえた。

しかも、友野はそのために幕府にとらえられ、ひさんなさいご（石ろう、はりつけ）をとげたという言い伝えが付近の農民の間に広くおこなわれているのを知って、わたしの関心はいっそう深まった。

（以下略）

タカクラテル氏が拙楼に御来宿されたのは、昭和二十一年～二十三年頃のことと思います。テル氏の風貌といえば、そのへんの田舎のおじさんという感じで、当時、五十六、七歳頃と思われるのですが、年よりは老けて見えました。労働運動という激しい闘志の親玉とはとても考えられないほど温顔をほころばせての御入来でした。

戦後の物資不足の時期でしたから、テル氏は一升ぐらいのお米を、お供らしき女性に持たせて来られました。お部屋は「桐二番」ときめられ、四、五日の滞在で、何回かにわけてたびたび見えられました。

この頃は、お出しする食事もお粗末なものでした。業務用配給のお酒を一、二本召し上がられたでしょうか……。

テル氏の拙楼での日常は、昼間は書き物をして過ごされ、外にも出られず廊下でお会いすることもありませんでした。御滞在中に、一度は男性のお二人連れが来訪されました。係りの女中さんの話では、地図や資料らしきものをひろげて、熱心に話し合われていらっしゃる御様子でした。

この時期が「箱根用水」という著書の下しらべであったことに気がついたのは、後々のことでした。

「箱根用水」は、一九五一（昭和二十五）年に出版され、以後、テル氏は国外に亡命されているから（七年間）拙楼にも来られることはありませんでした。

この「箱根用水」は、テル氏の実地調査、資料あつめ、それに労働運動での入獄という苦難の道を歩まれながら、貴重な歴史を解明されました。

この用水の利用権は静岡県側にあり、水利問題は多少緩和されたものの、今もって未解決のまま深い残痕をのこしているようです。

久保輝巳

海の屑（短篇集）　皆美社　1、500円

読書会の周辺（読書エッセイ集）　菁柿堂　1、300円

仰げば霧島（長篇小説）近刊　菁柿堂　1、600円

大友徳明 訳書

813 上・下（モーリス・ルブラン）　偕成社　各1、200円

二年間の休暇 上・下（ジュール・ヴェルヌ）　偕成社　各700円

アルセーヌ・リュパン（ジャン＝クロード・ラミ）　東京創元社　1、800円

（修正版）

タカクラ・テル氏

タカクラ・テル（本名、髙倉輝）氏の小説「箱根用水」のあとがき（一）を抜粋します。

一九四三年（昭和四十八年）の一月から五月まで『中央公論』にわたしの「箱根用水の話」がのった。これから、箱根用水のことがひろく知られるようになった。それまで、ニッポン一の観光地の箱根にありながら、この用水のことはほとんど知られていなかった。箱根用水は、ニッポン民族がなしとげた、もっとも偉大な事業の一つだと、わたしはまえから考えた。箱根・芦ノ湖の水を、湖水の西の湖尻とうげのふもとからほりぬいた、長さ一二八〇・三メートルの地下トンネルで、静岡県側におとし、数千ヘクタールの用地をやしない、今はその水で三つの発電所までつくっている。

この箱根用水のつくられたのは、およそ三百年まえ、徳川四代将軍・家綱の寛文年間（一六七〇年）で、七三三五両二分一朱の費用を使って完成している。これを、当時の人夫一人あたりの日当八十八文にわりあてると、のべ人員、八三万三五八六人を使ったことになる。当時として、いかに大きな事業だったかわかる。

地下トンネルは、東の箱根がわ（神奈川県）と、両方からほりすすめられたものだが、曲がり曲がって、少しの食いちがいもなく、ぴったりあっている。当時、いかに高い科学と技術がこの事業の基礎にあったかわかる。

箱根用水は、江戸の町人友野与右衛門が中心になって作ったものだが、かれは、幕府や藩の力を借りることなく、資金は同じ町人から援助をうけ、工事は深良村の名主・大庭源之丞と付近の農民の力だけによって、これをなしとげている。事業家としての友野の偉大さがすっかりわたしをとらえた。

しかも、友野はそのために幕府にとらえられ、ひさんなさいご（石ろう、はりつけ）をとげたという言い伝えが付近の農民の間に広くおこなわれているのを知って、わたしの関心はいっそう深まった。（以下略）

タカクラテル氏が当館にいらっしゃったのは、昭和二十一年～二十三年頃のことと思います。テル氏は、温顔の田舎のおぢさんという感じで、当時、五十六、七歳頃と思われるのですが、年よりは老けて見えました。労働運動の長とはとても考えられない風貌でした。

戦後の物資不足の時期でしたから、テル氏は一升ぐらいのお米を、お供らしき女性に持たせて来られました。お部屋は「桐二番」ときめられ、四、五日の滞在で、たびたび見えられました。

この頃は、お出しする食事も、非粗末なものでした。業務用配給のお酒を一、二本召し上がられたでしょうか。

テル氏の拙楼での日常は、昼間は書き物で過ごされ、外にも出られず廊下でお会いすることもありませんでした。御滞在中に、一度は男性のお二人連れが来訪されました。係りの女中さんの話では、地図や資料らしきものをひろげて、熱心に話し合われていらっしゃる御様子でした。

この時期が「箱根用水」という著書の下しらべであったことに気づいたのは、後々のことでした。

テル氏は労働運動での入獄という苦難の道を歩まれながらも、実地調査、資料あつめをなさいました。「箱根用水」は、一九五一（昭和二十五）年に出版され、以後、七年間、テル氏は国外に亡命されました。

この用水の利用権は静岡県側にあり、水利問題は多少緩和されたものの、今もって未解決のまま深い残痕をのこしているようです。

［解題］ここに紹介した澤村みどり「お宿帳（12）北条秀司先生書簡、タカクラ・テル氏」は、箱根塔ノ沢にある老舗温泉旅館「福住楼」が発行した『塔之澤文芸』終刊号（一九九九年七月）に掲載されたものである。「お宿帳」は、福住楼の三代目女将澤村みどり氏が、福住楼に滞在した川端康成、吉川英治、大佛次郎、北条秀司、阪東妻三郎ら作家・文化人の思い出やエピソードを連載したもので、創刊号から終刊号まで一二回連載された。

この澤村氏の文章によれば、タカクラ・テルは小説「ハコネ用水」を執筆するために昭和二一年から二三年頃に何回か滞在したことが知られる。では、実際にはいつごろ滞在したのかを推測してみると、一九四六（昭和二一）年は衆議院議員に当選し、国会での活動に時間を取られていること、また、四七年一一月には四八年一月から『大衆クラブ』に連載された小説「ハコネ用水」の執筆が終わっていることを考えると、四七（昭和二二）年四月の衆議院議員選挙に落選し、五月に母美弥が死去したのち以降、一一月の間が時間的余裕のある時期であることから、この期間に福住楼に滞在したのではないかと思われる。

修正版「タカクラ・テル氏」は、もとの文章に手が加えられているが、これは、現在の女将澤村良子氏によれば、「塔之澤文芸」同人で作家、関東学院大学教授であった久保輝巳氏の助言によって、みどり氏が一部表現を変えたとのことである（澤村良子氏より聴き取り、二〇二〇年一〇月一九日）。

『塔之澤文芸』は年刊で一二冊発行されているが、国立国会図書館には第一号（一九八七年）から第三号（一九八九年）までの三冊しか収蔵されていない。入手が困難な雑誌であるため、澤村良子氏のご厚意によりコピーさせていただいたものを紹介することにした。

なお、福住楼の歴史については、折橋哲彦『箱根温泉旅館・福住楼』（創元社、二〇一〇年）が詳しい。